

2017年度宮城厚生協会新入職員辞令交付式

64名のフレッシュな仲間とともに



2017年度 辞令交付式

厚生協会だより

2017年5月21日
第 343 号

発行
公益財団法人
宮城厚生協会
〒985-0835
宮城県多賀城市下馬
二丁目13番7号
TEL 022-361-1113
FAX 022-361-1124
発行人：平賀秀夫

4月3日(月)、坂総合クリニック1号館8階会議室において「2017年度宮城厚生協会新入職員辞令交付式」が執り行われました。今年度は64名のフレッシュな仲間を迎えました。小熊信理事長と新入職員代表の近藤優美医師のあいさつをご紹介します。

■理事長あいさつ

(公財) 宮城厚生協会理事長
小熊 信

皆さんおはようございます。公益財団法人宮城厚生協会理事長の「小熊」です。本日、当法人に入職された皆さんを職員一同歓迎致します。辞令交付式を迎え、本日から社会人としての生活がスタートするわけですが、今、皆さんの胸には、新たなスタートを切る喜び、緊張、不安などさまざまな思いが入り混じっていることと思います。こ

れまでの学生時代は、これから皆さんが歩んでいく人生のスタートラインに立つための準備期間に過ぎません。今までの人生で学んだこと、そしてこれから学ぶことを自らの力に変え、期待が現実の成果となるように大きく羽ばたいてほしいと願っています。

法人の沿革、概要、理念とビジョン

はじめに当法人の沿革、概要について紹介します。

当法人宮城厚生協会の原点は、1912年にまさしく今皆さんがいらっしゃるこの地に、「坂定義(さかさだよし)氏」が私立塩竈病院を開設したことに始まり、その後1937年に創始者の名を冠して「坂病院」に改名されたことに遡ります。坂先生によるこの地での貧しい住民への医療活動によって培われた「貧富の差に関わらず無差別の医療を実践する」という理念の元、より組織的、公益的な社会厚生事業を行うことを目的に、1950年に坂病院を中核に「財団法人宮城厚生協会」が設立されました。そ

の後坂総合病院として105年、そして宮城厚生協会としては67年という長い歴史の中で、当法人は時代、時代の重要な問題に真正面から立ち向かい、みずからも変革を重ねながら、働く人々と地域住民の「いのちと暮らし」を守ることに尽力してきました。その結果、法人によるこれまでの社会厚生事業が評価され、2013年により公益性の高い事業体として「公益財団法人宮城厚生協会」に生まれ変わっています。

現在当協会は、4病院11診療所、そして9つの訪問看護ステーションと6ヘルパーステーションを運営し、県内最大の民間医療事業法人に成長してきました。そして「患者の権利を尊重し、共感・協同・平等・安全の医療をめざしていく」ことを我々の組織理念として位置づけた上で、「差額ベッド」を持たずに「無料低額診療制度」などの導入を行って、「平等で公平」な医療と介護の事業をめざしています。

しかし近年、自民党政権による社会保障制度の切り崩し



祝辞を述べる小熊理事長

新入職員に望むこと

私は、当法人に入職して今年で37年目になります。この間、外科医として活動して参りました。この30数年間を振り返って私が感じてきたことをこれから同じ道を歩んでいくであろう皆さんに伝えることは、今後法人内で何を目標として、どのように歩んでいくべきかという命題に対するさやかなヒントになるのではないかと思います。

私はこれまで、外科医として1500例以上の手術を行ってきました。この中で、十数時間にわたって食事もせず、トイレにも行かず立ちっぱなしで手術を行い、その手術が無事成功した時には、他の職業では味わえないような達成感を感じることができました。これは、私が手術を行うことによって、患者さんの命を救わなければならないという外科医としての社会的使命が、達成された充足感に起因するものです。

他方、外科医としての仕事を通じて、一人の人間として「うれしさや喜び」が感じられたときは、様々な課題を抱え苦悩している患者さんと協働して問題解決が図られ、その結果私が医師として患者さんから「信頼されている」と感じられた時でした。そして手術が成功した患者さんの多くから信頼を得ることができましたが、すべての患者さんから得られるとは限りませんでした。他方、手術の結果が悪くても遺族から感謝・信頼されることも少なからずありました。つまり職業人としての達成感が得られることと、患者さんからの信頼感が得られることは、私たちの業務の中では、必ずしも同じではないのです。

.....

当法人の主要な事業は医療や介護であり、職種毎の関わりにより程度の差こそあれ、私たちの業務上の最終対象者は、「心情や感情を持ったヒト」であります。したがって皆さんが、これから当法人で仕事をしていく中で、究極的に目指していただきたいことは、職業人としての主観的な達成感を得ることにとどまらず、我々の最終的な業務の対象者である患者さんからの信頼が得られることを目指していただきたい。そして患者さんから信頼を得ていくためには、皆さんがこれまで学校で本や講義などを通じて学んできた知識や技術は、「患者さんから信頼」されるための必要条件にしかすぎず、人間である患者さんの悩みや不安、希望などの想いに「共感」をもって接することができかどうかの方が非常に重要です。患者さんは、共感してもらっていないと感じているときには、決して我々を信頼することはありません。

そして患者さんに共感できるようになるためには、患者さんの言葉・表情・行動などから「想い」や「心情」を感じ取る力、すなわち「豊かな感性力」が皆さんに備わっているかどうかが問われます。特に重要なことは、「生と死」「愛と憎しみ」「喜びと悲しみ」などの目に見えないものに対する感性がどれだけ醸成されているかが重要です。

結び

当協会の将来を担うのは皆さんです。そして多くの職員が患者さんから信頼されること、当法人が発展していくための原動力となります。皆さんがそのような自覚を持ち、本日より当法人内で「患者さんのための医療、介護」を私たちと一緒に実践し、多くの患者さんから信頼されることを心から期待して、歓迎のあいさつとします。入職おめでとう。

■新入職員代表あいさつ

初心を忘れず、患者さんから信頼される医療者になることを誓います

医師 近藤 優美

本日は、私たちのためにこのような式を開催していただき



き、誠にありがとうございました。新入職員を代表して、心よりお礼申し上げます。先ほど、理事長の小熊先生より、期待と励ましのお言葉をいただき、大変、身の引き締まる思いです。

日本各地で、少子高齢化や医師不足など、さまざまな医療の課題が存在する中、これから先、地域医療の役割がますます重要になってくると思います。地域間の医療格差を是正し、どこの地域に住んでいても、患者さんに平等な医療を、安心して受けていただけるように、私たちも努力していかなければならないと思います。

私は東日本大震災の後、復興のためのボランティア要員として、4年前に初めて宮城県を訪れました。そのとき関わった地域の方々がとても温かく、逆境に負けず、明るく前向きに日常生活を送っている姿に、勇気と元気をいただきました。震災から6年が経ち、各地で復興が進む今、これからは私が地域に貢献したいという思いが一層強くなりました。

私たちは、この道を志した希望や期待を胸に、病や痛みを抱えた人々の力になるべく、今日こうして、ようやく医療者としてのスタートラインに立つことができました。各々が初心を忘れずに、他者への感謝と思いやり、そして、患者さんから信頼されるような医療者になることをここに誓います。また、諸先輩方のご指導を受け、一日も早く、一人前の医療者として患者さんに向き合つことができるよう、一生懸命努力してまいります。ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、ご指導ご鞭撻下さいませよう、よろしくお願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが、新入職員を代表しての感謝と決意の言葉とさせていただきます。



「腰痛対策アンケートを実施」

リハビリの仕事は、その性質から勤務中の怪我と背中合わせの状態と認識して働いています。また、自分の怪我だけでなく、患者さんに怪我を負わせる危険性も孕んでおり、より注意が必要な仕事だと認識しています。

「リハビリ職員として 長く働き続けるために」

「腰痛対策アンケート」を実施して

作業療法士 武井 正美

そこで、リハビリ職員として長く働き続けるためにどうすればいいかリハスタッフに喚起を促し、自分の身体をケアすることの大切さを実感してもらつたため職場アンケートを実施し、その結果を基に論議してきました。

「3人に1人が仕事中に怪我」

アンケート結果から、スタッフの現状は1/4に筋骨格系の持病があることが分かりました。OTの4割に何らかの持病があることも判明しました。さらに、全体では女性の5人に1人は日常的にバンドを使用しています。

また、日常の仕事場面では、仕事中に怪我をしたスタッフは3人に1人という状況です。その内半数が腰痛のため受診という結果でした。原因は殆どが無理な体勢での乗動作にあります。乗動作に

手首を痛めたり、乗乗後枕位置への修正移動で腰を痛める場合も複数あります。

「普段の心がけが大事」

自由記載ではリハスタッフの多くが「安全に注意して無理しないようにしている。」「ゆとりを持って介助する。」「無理な時は応援を頼む。」など等、今まで怪我をした方も含めて、ほとんどの方が前記のようなことを心がけて仕事をしています。

また、自分の体の状態もほとんどの方が理解して仕事をしているのが現状です。



「イチローから学ぶ フィジカル・メンタル・テクニク」

このような状況にも係わらず怪我をしてしまうのは何故なのか考えてみました。出された意見からは42歳イチローが目に見えます。42歳で最高のパフォーマンスを維持し続ける秘訣は何かを考えてみます。「日々のトレーニングによるフィジカル強化」「一球に集中し焦らないメンタル」「バットコントロールなど打撃テクニク」「盗塁でのランニングテクニク」など等。そして最高のパフォーマンスが発揮できるよう毎日のコンディショニングづくりが最も大切と気づきます。それは、リハビリの仕事も含めてあらゆる仕事の現場に共通していると考えます。

リハビリの移乗場面でも、フィジカル、テクニク、メンタルが重要です。私たちは各部分が弱くても他の部分で補って移乗動作を遂行しています。

例えば「筋力はなくてもテクニクで移乗、焦っていても筋力でカバー」「テクニク

ク無くても落ち着いて実施、相手の安心感が協力動作引き出す」「テクニク無く、メンタルは焦ってドキドキしているがフィジカルでカバーして移乗」。

それを支えているのが毎日の体調などコンディショニングの良し悪しです。

「怪我をしない

「コンディショニングをつくる」

そこで、怪我をしないパフォーマンスを発揮するため、毎日のコンディショニングを維持するためにどうするか。そのためには日常的に体力づくりやストレッチ・体操での体のケアについて重要で必要と職場内議論で一致しました。

リハ室では「腰痛体操」を病院全体で提起された約2年前から継続実施しています。が、日常的に体力づくりは無理としても、朝の腰痛体操への参加を促していこうと考えていました。朝の情報収集や打ち合わせで参加できないスタッフがいることは前提で、参加できるスタッフで8時半から2分程度です。



12月はレッツトライヘルスに職場エントリートし取り組みました。また、体力づくりなど日常的な取り組みが必要との意見もあるので、個々人が日常的に身体を動かす機会を意識することが大切と考えています。

また、今回の調査では「朝ごはんを食べることが大切」との意見を挙げた方もいて朝食抜きでの仕事も少なからずあるようです。食事抜きの弊害は様々な分野でも発信されており、今後の課題にしていきたいと思っています。



第7回宮城民医連

学術運動交流集会

テーマ

Your action. Our future.

～民医連で働く自分たちに、誇りを持とう～



記念講演

講師

藤末 衛氏

全日本民医連会長

特定医療法人(社団)

神戸健康共和会理事長

テーマ：「発展期の民医連らしさ、その希望と未来が見えてきた」

これまでの民医連人の魂を引き継ぎながら、何を可視化するのか。民医連の医療と介護は「発展期」というコンセプトで、皆さんと同時代を生きる喜びと確信を共有したいと思います。

日時

2017年 **6月18日** 日

9:30～15:00 ※受付9:00～

会場

フォレスト仙台 2F

仙台市青葉区柏木1-2-45 Tel.022-271-9340

皆さんのご参加をお待ちしております！

主催／第7回県連学術運動交流集会実行委員会

.....
長く働き続けるために職場内で今回はアンケートと話し合いを実施しましたが、腰痛

体操を継続しながら職場内で折に触れて、良い仕事をするには何が必要かを発信していきたいと思っています。

NST (栄養サポートチーム) 教育認定施設に認定される

食養室室長 管理栄養士 池本あゆみ

入院患者様の栄養管理に 日々取り組む

坂総合病院NST（栄養サポートチーム）は、2005年にNST稼働施設認定を受け、今年で12年目となります。栄養について専門の知識を持つ医師、コメディカルスタッフがチームを組み、入院患者様の栄養管理に日々取り組んでいます。

診療報酬上、NST加算を算定するためには所定の研修を修了した医師の他、日本静脈経腸栄養学会（JSPEN）が認定した教育施設において合計40時間の実地修練を修了した看護師、薬剤師、栄養士が回診に参加する事が必須要件となります。

宮城県に教育施設は東北大学病院、仙台オーブン病院、東北医科薬科大学他、11施設あります。これまでは当院勤務と他院通院を要する両立の困難さや、募集枠の制限により、実地修練終了者を増やせず、NSTの回診メンバー不足が大変な状況でした。

ここで実習出来る様に すれば

そこで、「実習に行くのが大変なら、ここで実習出来る様にすればいいじゃないか!」という事で、坂病院での教育施設認定を目標に準備をコツコツと進めていました。

2015年に伊在井NST委員長が学会認定医を取得し、この度2017年3月、日本静脈経腸栄養学会からNST教育認定施設として認定されました。宮城県では12施設目となります。

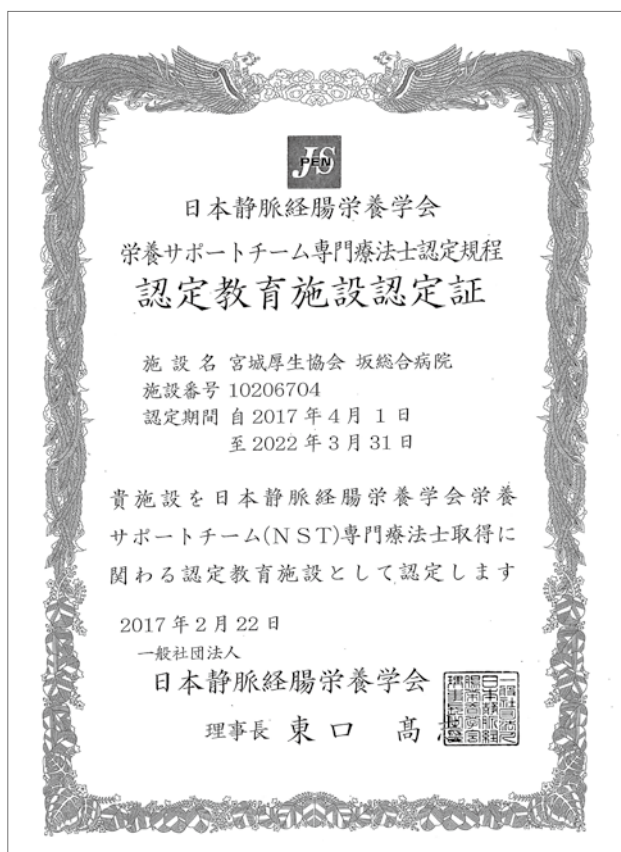
今後は教育プログラムを整備し、実地修練を行う予定です。2017年度は11月に5日間の日程を予定しています。栄養に関する講義、NST回診や褥創回診への参加、症例検討、NST専門療法士試験対策、情報交換会等、知識が身につき、かつ、

楽しい内容を目指しています。

坂病院のスタッフ以外にも、広く研修生を受け入れます。栄養を学んでみたい方、NSTメンバーとして患者様の栄養管理に関わりたい方は、参加してみたいかがでしょうか。詳細が決まり次第、坂病院HP等でも紹介予定です。

ホームページも 絶賛公開中

また、伊在井先生作「下馬栄養倶楽部」のホームページも絶賛公開中です。「NSTがいなくてもできるモン」「経腸栄養塾」「静脈栄養塾」等、楽しく学べる情報が盛りだくさんです。「下馬栄養TV」ではPICCの挿入、PEG増設手技、食物繊維の使用方法等の動画も色々と見る事が出来ます。こちらもぜひご覧下さい。





九州・阿蘇の夕焼け（職員旅行）

さわやか **エッセイ**

夢

Beautiful Dreamer

協会事務局 **横田 渉**

「光陰矢のごとし」と言いますが、月日の流れは早いもので、坂病院で働き始めて35年、今月（5月）定年を迎えます。「退職したら何をするの」と周りから聞かれますが、改めて何かをするあてはありません。仕事のためにやりたいことを我慢していたということも無く、好きなように生きてきたのだから当然でしょうね。

東京の建築設備会社から発足間もない坂病院の電算室要員として転職してきたのは、二人目の子供が生まれて、「子育てには少し田舎の方が良いな」と思ったからでしたが、入職早々後悔し、じたばたと当時の管理部に迷惑をかけたこともありました。それでも良き先輩や同僚に恵まれ、大過なく今日まで楽しく過ごせて来たことに感謝です。子供達もとうに独立し、長男はベトナム・ホーチミンに、長女は東京府中とそれぞれ本拠を移しています。社会保障で学んだ「年金生活」に一抹の不安を覚えながらも、当面は、これまでの楽しみの延長に、最近妻が借りた畑仕事の手伝いが加わることになりそうです。

私の趣味は「歌うこと」

「仕事が趣味」というと、仕事熱心な様に聞こえますが、一人の時はパソコンを弄っているのが日課です。坂病院で働き始めて間もない頃、職場にきた長男が「お父さんはずっとファミコンできて良いな」と言ったことがあります。なるほど、子供のゲーム機のように時間制限されることもなく、好きなことをして給料を頂いてきたのだから幸せなことですね。もう一つの私の趣味は、「歌うこと」です。男子校時代の男声合唱団を皮切りに、大学合唱団、そしていくつかの社会人の合唱団で歌ってきました。その他にも仙台オペラ協会の公演や多賀城市の市民ミュージカル、中新田バツハホルの節目の演奏会にも何度か出演しました。そんな中で、20年ほど前に指導を受けたことをきっかけに、声楽の個人レッスンを受ける機会を得、月に1回ほどですが、今日まで続いています。もともと、1回に2曲程の練習曲の指導をしていただくのですが、ちっとも上達せず、1年以上も同じ曲を繰り返していることもたびたびです。2年に一度位のペースで「発表会」があり、わずか数分とはいえ、一人で歌う緊張感は、合唱団の一員として歌っているのとはだいぶ違います。今年の8月にシュトラウスホールで発表会の予定があり、今から緊張しています。



声楽の師佐藤順子さんと
（オペラ出演時）



多賀城市民ミュージカル
2001年公演



中新田バツハホルの
ステージで

先の目標は「ソロコンサート」

先の目標とはいえば、「母の白寿のお祝いに70歳で初めてのソロコンサートを開く」と、内心決めてみたのですが、昨年酔った拍子にうたごえの仲間に話したところ、「それは良い、頑張れ」ということになり、伴奏者やお手伝いのメンバーもすぐに決まってしまう、引っ込みがつかなくなりました。まだ先のこととはいえ、今のペースでレッスンに励んでも、コンサートで披露できるほどレパートリーを作れるのか、先行き不安です。（その頃には、みんな忘れていると思いますが…）